ひみつのこうかん日記

八神　梢

一　マユの世界

「ただいま」

マユは学校から帰ってきました。げんかんにつづくお庭には、コスモスがゆれています。

「マユ、おかえりなさい」

「おかあさんあのね、先生がね、来週、うちにある昔使ってたものを何か一つ持ってきてくださいっていってたよ。社会の時間に使うんだって。うちにもなにかあるかなあ？」

「まあまあ。帰ってきていきなりだねえ。そうねえ……屋根うら部屋に行けばきっと何かあると思うわよ。あとで行ってみたら？　はい、おやつ。手、あらってね」

おかあさんは、マユにカステラを出してくれながら言いました。ランドセルをおろして手をあらい、カステラを口いっぱいにつめこ

むと、マユはれいぞうこから出した牛にゅうで流しこみました。
「うーんおいしい！　やっぱりカステラには牛にゅうがいちばんだね。ごちそうさま」
「ちょっと屋根うら部屋見てきてもいい？」
「いいけど、あんまりちらかさないでね」
「はーい」
屋根うら部屋は、マユの部屋がある二階からもう一つ、階だんを上がった所にあります。ふだんはあんまり使わない、ストーブやせん風きや、ひな人形なんかをしまっておく、物おき部屋です。マユの家は古い家なので、昔のものがいろいろとおいてあるのです。
「一人で入るのはじめて……」
せまくてうすぐらい階だんを四つんばいになりながら、こわごわ上りました。
とびらをあけると、夕方のオレンジ色の光が、まどからマユをてらしました。
「まぶしっ！」
急な明るい光で一しゅん目の前が暗くなっ

たけど、しばらくすると目がなれてきました。部屋の中は、いろいろな物であふれています。

「えーっと、昔のもの昔のもの……何かいいものあるかな」

ほこりっぽい部屋の中をさがしていると、おくのほうに小さな木のつくえがありました。マユのひざくらいの高さで、引き出しがならんで二つついています。

「わーなんかかわいいな」

右の引き出しを開けてみると、赤い小さなはこがあります。ふたをあけると、すきとおったガラスのおはじきや、みじかいえんぴつが二、三本。それからきれいなお花のもようの紙がたばになって入っていました。

（わぁかわいいな。たから物入れかなあ）

左の引き出しを開けてみると、ぎん色の細長い小さなふでばこみたいなものの下に、古いノートが入っていました。青い小鳥が表紙にとんでいます。

（なんだろう？）

ノートをぱらぱらとめくってみました。

（えっ？　これ、だれのだろう？　なにか書いてある。見ちゃってもいいかな……）

おそるおそる、そおっと、マユはさいしょのページをひらいてみました。

九月一日

はじめてのわたしの日記ちょう。きょう、かあさまに買ってもらいました。表紙の青い鳥さんとってもかわいい。うれしいな。

九月二日

二学期が始まりました。みよちゃんといっしょに学校に行きました。四年生になって、みよちゃんとおんなじ組になれて、よかったなあ。ずっとお友だちでいられますように。

（なにこれ？　日記？　この子、四年生なんだ。わたしといっしょ。だれのだろう？）

ノートのうらを見てみると、『わかこ』と

書いてありました。
（わかこちゃん？　どんな子なんだろう？）
日記は続いています。学校のことや家のこと、その日あったことがいろいろ書いてあります。マユはドキドキしながら読みました。
「マユー。なにかいいものあった？」
下からおかあさんの声がしました。
（わすれてた。昔の物さがしてるんだった）
マユは思い出して、キョロキョロしました。
（そういえば、ノートの上にあったぎん色のやつ、なんだろう？）
思い出して引き出しからとりだしてみると、ぎん色ににぶく光るそれは、えい語で何か書かれています。横にずらりと小さなまどみたいなのがならんでて、マユの手のひらよりも少し大きくて細長い形。
（これなんだろう？　見たことあるような？楽器かな？おかあさんに聞いてみようっと）
マユはなんとなくノートをもとにもどすと、ぎん色のそれをにぎって、いそいで階だんを

おりました。キッチンでごはんを作っている
おかあさんに聞きました。
「ねえねえおかあさん、こんなの見つけたん
だけど、これなあに？」
「あら、なつかしいねえ。これは昔のハーモ
ニカよ。こうやってふくのよ。見ててね」
おかあさんは服のそででちょっとふくと、
それを横にくわえました。
ファーン　プーン　プァーン
「なんだかなつかしい感じの音だねえ。でも
聞いたことあるかも。ねえ、なんかふいて」
「そうねえ……」
おかあさんはうれしそうにふき始めました。
「聞いたことない曲だけど、すてきな曲！」
「でしょう？　おかあさんも大すきな曲なの。
『峠（とうげ）の我（わ）が家（や）』っていったかな？昔、おかあ
さんのおばあちゃんに教えてもらったのよ」
「ふーん。そうなんだ。おかあさんのおばあ
ちゃんってことは？」
「マユのひいおばあちゃんね」

「わたしのひいおばあちゃん？　会ったことあるかあな？」
「そうねえ……マユが生まれる前になくなってしまったから、マユは会ってないわね」
「そうなんだ。会いたかったなあ……ねえ、これ、学校にもっていってもいいかな？　昔使ってたものだよね？」
「いいけど、じゃあ少しふけるようになってるといいかもね。説明しなくてもいいように」
「うん……そうだね。その方が話さなくていいもんね。おかあさん、教えて」
「いいわよ。ハーモニカはね、ふいて出る音と、すって出る音があるのよ。マユはピアノひけるからドレミがわかるし、きっとすぐにふけるようになるわよ」
「そうなんだ。ちょっとむずかしそうだけど、わたしにもふけるかなあ？がんばってみる」
　その日からマユは、いっしょうけんめい練習して、その曲をふけるようになりました。

さて、もう一つ、マユにはずっと気になってることがありました。引き出しに見つけた、あのノートのことです。こっそり読んでしまったので、おかあさんにもだまっていました。

ノートを見つけた日から三日後、また見に行ってみました。また、オレンジの夕日がさす屋根うら部屋の、引き出しをあけました。

（えーっと、この前読んだのが九月の終わりくらいまでだったかな？　つぎは……）

十月一日

きょうは、遠足に行きました。海のほうまでみんなで歩いて、砂はまでおむすびを食べました。みよちゃんといっしょに食べました。かわいいさくらの花みたいな貝がらも、いっしょにひろいました。みよちゃんと、たからものにしようって、やくそくしました。

それなのに、みよちゃんは、貝がらを、よっちゃんにあげちゃったっていうの。さみし

いなあ。わたしのことときらいなのかなあ？

日記はなぜかここまでで終わっていました。でも、その後に、小さな貝がらが二まい、かいてあります。かわいいさくら色です。（十月一日って、ちょうどきのうだなあ。これっていつ書いてるのかな？）

マユはなんだかふしぎな気持ちになりました。ちょっとさみしそうなままの日記に、おへんじを書きたくなってきました。引き出しに入っていた小さなえんぴつをちょっとかりて、日記のつづきのところに書いてみます。

十月二日

こんにちは。わたしはマユっていいます。かってに日記のおへんじ書いちゃっておこるかなあ？　さみしそうだったから……

さくら色の貝がらの絵、すごくかわいね。きっと、みよちゃんって、やさしい子だからよっちゃんって子にどうしてもってたのまれ

て貝がらあげることになったんだと思うよ。
だからきっと、ごめんねって思ってるよ。

（こんなの書いてもしょうがないかあ。でも、わかこちゃんに、つたわるといいなあ）

書き終わると、マユはつくえの前で、ハーモニカの練習をしました。夕日をうけて、ハーモニカがキラリと光りました。

（ふう。ホントにいい曲だなあ……）

ハーモニカを学校に持って行くのはあさってです。マユはドキドキしてきました。

二　わかこの世界

「またあしたね」

わかこはみよちゃんに小さく手をふって、かどをまがりました。小さなためいきをつきながら、家に帰ってきました。げんかんにつづくお庭には、もも色のコスモスがしんぱい

そうにゆれています。

「ただいま」

今日は家にだれもいません。おかあさんは、きのうねつを出した妹のきぬこを、病院につれていってるはずなのです。一年生のきぬこは小さなころから体が弱くて、よくねつを出す子なのです。そのたびにおかあさんも病院につきそって入院したりするので、わかこはよく一人でおるすばんなのです。

ミーミー

おくのへやから白ネコが走ってきました。

「ミー、ただいま」

わかこはミーをなでました。ミーはいつもわかこの話し相手です。

「ミー、あのね。みよちゃんったらね、おそろいのたからものにしようってやくそくしてた貝がら、よっちゃんにあげちゃってんだって。なんでだと思う？」

ミー？　と鳴くと、ミーはわかこのはなをペロンとなめて、じっと見つめてきます。

「あっ。ちゃぶ台におやつあるね。やきいもだ！　ミーも食べる？　いっしょに食べよ」
うれしそうなミーに、おいもを少しわけてあげて、二人でおやつの時間です。わかこは少し元気になりました。
わかこはつくえの引き出しを開けて、ハーモニカを出しました。おとうさんが、おみやげに買ってくれたたから物です。おとうさんが教えてくれた曲をふきました。ハーモニカもその歌も、遠い国のものだときいています。
ミーがつくえの上にとびのったはずみで日記帳が落ちて、パサリと開きました。開いたページを見て、わかこはおどろきました。
「ええっ？　なにこれ？　なにか書いてある。だれかがおへんじ書いてくれてる！」
（えっ、十月二日ってきのうだよね？　なんで書けるの？　引き出しの中なのに……ええっと、この子、マユちゃんっていうんだ。でもやさしいなあ。そうだよね。みよちゃんも、とってもやさしい子だもんね。きっと、よっ

ちゃんにたのまれてことわれなかっただけだよね。明日、聞いてみようっと）

わかこは、日記を書きました。

十月三日

こんにちは。わかこです。マユちゃんっていうんだよね。おへんじ書いてくれてありがとう。とってもびっくりしたけど、うれしかったよ。そうだよね。みよちゃんって、とってもやさしい子なの。明日、話してみるね。マユちゃんは、どこでこれ書いているのかな。

ふしぎだねえ。でも、もしこれを読めるなら、またおへんじ書いてくれたらうれしな。

わかこは、その後に、小さくねこのミーの絵をかきました。ふわふわをかくのがちょっとむずかしかったけど、しっぽがじょうずにかけました。絵の下に、『うちのねこ　ミー』と、書きました。

わかこは、ふうっと息をはいて、日記帳を引き出しにしまいました。

（マユちゃんにこれ、とどくといいな）
そしてまた、ハーモニカをふきました。つくえの上のミーが、首をかしげてきいてくれています。ハーモニカがキラッと光ります。

三　マユとハーモニカ

「行ってきます」
マユは小さな声で言って、げんかんを出ました。今日は学校にハーモニカを持って行く日です。ランドセルには、かわいいお花のふくろに入ったハーモニカがゆれています。お母さんがぴったりに作ってくれたふくろです。
「おっ。マユ！　おはよう」
となりの家から男の子が走って出てきました。ソラくんです。ソラくんは、マユと同じクラスのおさななじみです。
「ソラくん、おはよ。昔のもの持ってきた？」
「ぼくは、これ。せんたく板っていうんだ。

ばあちゃんちでかりてきた」
ソラくんは、かばんからギザギザがついた木の板を取り出しました。
「わあ。大きいねえ。おせんたくで使うの？」
「うん。そうなんだって。昔はせんたくきなんてなかったからこれであらってたんだって」
「そうなんだーすごいねぇ。わたしはこれ」
「おっカッコいいなそれ。ふくやつだろ？」
「うん。ハーモニカっていうの。ひいおばあちゃんが使ってたって」
「そうなんだ。マユもそれ、ふけるのか？」
「うん、みじかい曲、練習してきたんだー」
「そっかあすごいな、マユ。ぼくも聞きたいな。教室でふけるといいな」
「うん！」
マユは小さな声で答えました。
学校に着くと、マユはせきにつきました。
クラスのみんなは、持ってきた物をそれぞ

れ見せ合っていました。
「おはよう。マユちゃんは何持ってきた？」
となりのユウちゃんが聞いてきました。
マユは少しわらった顔で、つくえの上にハーモニカをおきました。
「わぁ。これなあに？　きれいだねえ」
みんなが集まってきたけど、マユは何も言えません。
「ハーモニカっていうんだって。マユはこれ、ふけるんだって。すごいよな」
ソラくんがたすけてくれます。マユは、学校ではひとことも話すことができないのです。
おさななじみのソラくんとは話せるのですが、ほかの子や先生とは話せません。話さなきゃいけないってわかってはいるのに、どうしても声が出ないのです。でも、みんなはマユが話せないのをわかってくれているので、マユはうなずいたり首をふったりだけでも、なかよくしてくれています。
「おはようございます。はいはいみんなせき

についてー」

たんにんの山下先生です。朝の会のあと、さっそく社会の時間になりました。

「みんないろいろと持ってきてくれてるな。じゃあ一人ずつ何を持ってきたか教えてもらおうかな」

木のおべんとうばこ、古いそろばん、かいものかご、木のくしや、かんざし、メンコやお手玉なんかもあります。教室は、まるではくぶつかんみたいになりました。

ドキドキしているうちに、マユの番になりました。ハーモニカを出してみんなに見せると、先生はうれしそうに言いました。

「おっハーモニカだな。なつかしいなあ。ずいぶん昔の……外国のものかな？　みんなにどんな音が出るか聞かせてあげられるかな？」

マユは小さくうなずくと、ハーモニカをくわえます。

ファン　ファーン

はじめは小さくふるえるような音でした。
「聞いたことあるー」
みんなが言ってくれました。マユはゆう気を出して、いっしょうけんめい家で練習した曲をふきました。
「わあーすごいねマユちゃん！　いい曲！」
教室は、パチパチとみんなのはくしゅでいっぱいになりました。
「マユさん、すごいですねー。おうちで練習してきてくれたのですね。すてきな曲ですね。ありがとうございました」
先生やみんなにほめてもらえて、マユはとってもうれしくなりました。ソラくんが後ろをむいてニカッとピースをしてくれました。
「ただいまあ。あのね、おかあさん」
学校から帰ると、マユはランドセルのまま、今日のことを話しました。
みんながマユのハーモニカにすごいねって、はくしゅしてくれたこと。山下先生がほめて

くれたこと。いつも教室では何も話せないマユが、今日はハーモニカで、ステキな曲でしょって、みんなに気持ちをつたえられたこと。それがとってもうれしかったことです。

いっぱい話したくておしゃべりが止まらないマユに

「マユ、よかったねぇ。みんなに気持ちがつたわるって、うれしいよね」

おかあさんもうれしそうに、マユをだきしめてくれました。

「うん。うれしかった。おかあさん、ハーモニカ教えてくれてありがとう。それから、ひいおばあちゃんも！　今はもう言えないの、とってもざんねんだなぁ」

「そうねえ。でも、マユが心の中でいつもありがとうって思うだけでも、きっとその気持ち、つたわると思うよ」

「うん、そうだね。ねぇおかあさん、ひいおばあちゃんって、お名前なんていうの？」

「おばあちゃんはね、わかこさんって名前

よ」

「わかこさん？　そうだったんだ！　おかあさんありがとう。教えてくれて！」

マユはあわててそのまま屋根うら部屋まで階だんをかけのぼりました。

屋根うら部屋に着くと、はぁはぁいきをしながら、つくえの前にすわりました。青い鳥の表紙の日記帳を出すと、

（ちょっとまって。ええっと……この日記のもちぬしのわかこちゃんは、わたしのひいおばあちゃん？　ってことは、わたしって、ひいおばあちゃんの日記を読んでたんだ……）

そしてページを開きました。そこには、わかこからのおへんじが書かれています。

「えっ？　わかこちゃんからおへんじ？　そんなことある？　だって……わかこちゃんって、ひいおばあちゃんだよね？」

びっくりしすぎて、マユは思わずさけんでしまいました。頭がグルグルしています。

（おへんじ書いてくれてありがとうって書いてある。またおへんじ書いてもいいの？　ありがとうの気持ち、つたわるのかも！）

マユは少し考えて、また、小さなえんぴつをかりて、日記におへんじを書きます。

十月四日

こんにちは、マユです。わかこちゃん、おへんじ書いてくれてありがとう。わかこちゃんの日記を、かってに読んじゃってごめんなさい。それに、かってにおへんじまで書いちゃって、ホントにごめんなさい。

でも、わかこちゃんからのおへんじ、とってもうれしいです。

それからね、わたし、わかこちゃんにすっごくすっごくありがとうが言いたかったの。

わかこちゃんの引き出しに入ってるハーモニカ。これのおかげでわたし、学校で、みんなにはじめて気持ちをつたえられたんだ。わかこちゃんから教えてもらった曲（正かくに

は、おかあさんに教えてもらったんだけど）とってもすてきな曲だよね。わたし、いっしょうけんめい練習して、ふけるようになったんだ。その曲をね、今日学校でみんなの前でふけたんだよ。わたし、いつも学校ではみんなとうまく話せないの。話そうと思っても、のどのおくから声が出てこないの。家では話せるのに。でも今日、ハーモニカならふけたの。みんなにはくしゅしてもらえて、とってもとってもうれしかったんだ。わかこちゃんのおかげだよ。ありがとう。

それでね、さっきおかあさんから、日記のわかこちゃんが、わたしのひいおばあちゃんだって教えてもらって、今、いそいでこの日記を見たら、わかこちゃんからのおへんじが書いてあって、ホントにびっくりだよ！

わかこちゃん、しんじられないと思うけどわかこちゃんは、わたしのひいおばあちゃんなんだって。ひいおばあちゃんってね、おかあさんのおばあちゃんってことだよ。わたし

のおかあさんのおばあちゃんが、わかこちゃんなんだって。なんだかむずかしいんだけどね。それにわたしと同じ四年生のわかこちゃんがひいおばあちゃんって、ぜんぜんおかしくって、ふしぎすぎるんだよね。

でも、この日記帳が、わたしとわかこちゃんをつなげてくれたんだよね！　ホントにホントにびっくりしすぎてまだむねがドキドキしているよ。下でおかあさんがよんでるから今日はこれでおしまいにするね。このこと、おかあさんにはまだ言ってないんだ。きっとしんじてくれないし、おかしいって言われるから、ないしょにしようかな。二人だけのひみつにしない？　日記をじゅんばんに書いてくの、こうかん日記っていうんだよね。学校でやってるお友だちがいるんだよ。わたしもやってみたかったけど、話せないから言えなかったよ。ひみつのこうかん日記、二人でやろうよ！

マユは日記を引き出しにしまうと、急いでかいだんをおりました。おかあさんが、おやつのホットケーキを焼いてくれていました。

「マユ、急に上行っちゃって、どうしたの？」

「わすれないうちに、宿題やってたよ」

「そうだったの。えらいわね。はいどうぞ。手、あらってね」

「ありがとう！　いただきまーす」

マユは、メープルシロップをたっぷりかけて、ホットケーキをほおばりました。牛にゅうをいっきに飲むとおさらとコップをさげて、「ごちそうさま！　宿題のつづきやってくる」と、階だんをかけ上りました。

また、屋根うら部屋に着いたマユは、引き出しから日記を取り出します。まどからの夕日で、日記はオレンジにそまっています。マユは、さっきのつづきのところに、絵をかきました。今食べたホットケーキの絵です。メープルシロップと、ホワホワのゆげが、じょ

うずにかけました。絵の下に『今日のおやつのホットケーキ』と、書きました。

書きおわるとまゆは、ランドセルからハーモニカを出してあの曲をまた、ふきました。

（ふう、いい曲、夕日にぴったり。これ、わかこちゃんもふいてるのかなあ）

四　わかこの歌

わかこはそっと日記をひらきました。日記には、マユからのおへんじがびっしり書いてありました。読んでいくうちに、わかこはびっくりしすぎて、ずっとさけびっぱなしです。

「えーっ！　ほんと？　マユちゃんがハーモニカを？　わたしがひいおばあちゃん？」

ねこのミーが走ってやって来ました。今日も家には、わかことミーしかいないので、しんぱいなのでしょう。ミーはわかこのひざにのりました。

「ミー、びっくりさせてごめんね。でもね、

こんなことある？　どうなってるの？　わたし、ずっとずっと先に生きてるマユちゃんと、日記で話してるってことだよね〜

少し考えて、日記のおへんじを書きました。

十月五日

こんにちは、わかこです。ホントにびっくりしたよ。わたしがマユちゃんのひいおばあちゃんって……まだしんじられないけど。

でも、それよりもハーモニカ、マユちゃんもふけるようになったんだね。それで学校でみんなに聞いてもらえたんだね。ホントによかったね。わたしもあの曲、だーいすきなんだ。とうさまが、遠い外国の曲だって言ってたよ。それとね、今日みよちゃんとなか直りしたよ。やっぱりあやまりたかったって。マユちゃんのおかげだよ。ありがとう。

それから、ホットケーキ、とってもおいしそうだね！　ゆげがでてるから、あったかいんだねー。食べてみたいなあ。わたしの今日

のおやつは、シベリアっていうの。これはあったかくないけど、中にようかんがはさんであってあまくておいしいよ。大すきなの。

あと、ひみつのこうかん日記、とってもすてき！　マユちゃんとできてうれしいな。

わかこは、さいごにシベリアの絵を書きました。三角に書くのがむずかしかったけど、切り口がじょうずにかけました。

そしてまた、ハーモニカをふきました。

十月六日

マユです。わかこちゃん、シベリアっておやつ、はじめて見たよ。とってもおいしそうだね。わたしも食べたいな。

それからね、この日記、ハーモニカをふかないと、とどかないのかな。きのう書いたけど、とどかなかったみたいだね。今からふいてみるね。今度はとどきますように。

十月八日

わかこです。そうなんだ。わたしもいつもハーモニカふいてたよ。このハーモニカと日記帳が、わたしたちをつなげてくれるんだ！

今日ね、わたし、あの曲に歌詞（かし）をつけてみたんだよ。マユちゃんに歌ってほしくて、いっしょうけんめい考えたの。もしよかったら歌ってみて。ここに書くね。

「ありがとう
おはよう　あそぼう
こんにちは　さようなら

風吹けば
雲にのって
言葉がとんでく

いっしょに歌おう
友だちになろう

声は歌の

つばさにのって
みんなにとどくよ」
どうかなあ？　ホントはいっしょに歌いたいんだけど、それはできないよねきっと……
マユちゃんの歌、聞きたいなあ。

十月九日
マユです。わかこちゃん、ありがとう。歌を作ってくれて、とってもうれしいよ。何回も何回も歌ったよ。歌いながら、なみだが出てきちゃった。わたしを思って作ってくれた歌だよね。ホントにホントにありがとう！

十月十日
わかこです。マユちゃん、歌を歌ってくれてありがとう。わたしもいつもいつも歌うからね。一人でおるすばんのさみしいときも、マユちゃんのことを思い出して、歌うね。ずっとずっと歌うね。ハーモニカも！

十月十一日

マユです。ありがとうわかこちゃん。心の中でわかこちゃんといつもいっしょに歌っているからね。

気がついたらこの日記帳、もうこのページで終わりになっちゃったね。こうかん日記も終わりになっちゃうのかなあ。もしそうなったらすごくさみしいな。でも、わかこちゃんのこと、ずっとずっとわすれないからね。いままでホントにホントにありがとう！

日記帳の最後のページのあと、いくら待っても、わかこからのおへんじはもうありませんでした。とってもさみしかったけど、マユは毎日わかこの歌を歌って学校に行きました。

「ただいま！　おかあさん、今日ね、となりの席のユウちゃんに、おはようって言えたよ。小さくだけど。あのね、この歌のおかげなの」

マユはおかあさんに歌ってあげました。
「あら？その歌、おかあさんも知ってるわ。おばあちゃんがよく歌ってくれたもの」
おかあさんは、おやつを出してくれながら、いっしょに歌ってくれました。
「はい。今日はシベリアっていうおかしよ。おばあちゃんが大すきだったの」
「シベリア？　そうだよね！　知ってる！わたし、ずっと食べたかったんだ！」
マユは、牛にゅうを取りにいきました。